

## 林業相談

## 雪腐病の防除について

問 昨年の秋に2年生のサクラ苗を購入し、ななめに仮植をしたところ、今春雪がとけたら幹に白いものがつき、樹皮が腐って枯れていました。防除法をおしえて下さい。(空知管内三笠町K生)

答 雪腐病によるものと思われます。ななめに仮植したために、苗木が雪におされて直接土についたことに、大きな原因があります。土壌中には、植物に害を与える病原菌が沢山住みついています。たとえば苗木に立枯病をおこす、フザリウム (Fusarium) 菌、リゾクトニヤ (Rhizoctonia) 菌、北海道でトドマツの雪腐病菌として有名な、暗色雪腐病菌である、ラコデイウム (Rhacodium) 菌とか、ボトリテイス (Botrytis) 菌など多くの種類の菌が土壌中の有機質の上に菌糸の形で、また土壌中には胞子などの形で生息しています。雪のなかで苗木が直接に、土につくと、これらの菌のうちで低温下でも生活できる菌は苗木にとりついて、発病させ葉や幹を枯らすいわゆる雪腐病をおこします。とくに北海道のように積雪期間が長い地方では、雪腐病の被害が多いのです。雪腐病の発生は積雪期間 100日がめやすとなって、これ以下だとこの病気は少なく、100日をこえると、こえた日が多くなればなるほど病気の発生は多くなるといわれています。

この質問でサクラに害を与えた菌と同じものでカラマツ山出し苗にも害をうけている標本がとどけられました。この菌については、いま調査中ですが、おそらく、キリンドロカルボン (Cylindrocarpus) という菌だろうと思いますが、この菌も土壌中に生息している菌です。北海道では珍しい菌で、以前にカラマツ2年生苗を東仮植しておいて、この菌の害をうけた経験があるだけです。トドマツ暗色雪腐病のように、毎年道内のどこかで発生している雪腐病もありますが、その冬の積雪の状態、土壌凍結の有無、融雪時の気温、土壌の排水などの環境条件によって、予測しない菌が発生して多くの被害がおこることがあります。

このような雪腐病を防除する上からも、秋仮植は十分気をつけなければいけません。とくに丈の高い苗木の仮植で注意しなければならない点は、苗木が雪でおされて直接土につかないようにすることです。直接土に苗木をつけない工夫としては、苗が倒れたとき地面につかないように、板をひいておくなどがあります。雪腐病からまもるための一般的な方法にはつぎのようなことがあります。

1. 仮植苗は間隔をとり、風通し、水はけをよくすること。密植すると針葉樹の場合には葉が重なりあって雪どけ水の排水が悪くなったり、風通しが悪くなって菌の発育を助ける結果になります。

2. 土壌の排水をよくすること。排水が悪いと、苗そのものが弱るとともに、湿度が高いと

菌の発育がよくなり、病害発生につながります。クロボク土地帯の苗畑では、とくに排水に注意して下さい。クロボクはみためには排水がよいようにみえますが、非常に排水が悪いので注意して下さい。

3. 根雪前にチュウラム剤などの雪腐病防除薬剤を散布すること。薬剤を散布してから1週間から10日も太陽光線にさらされると、薬剤の効果がなくなるので、なるべく根雪になる直前に散布するようにすること。

4. 積雪期間が長びくような年には人工消雪をして早く苗木を雪からだして、かわかすようにすること。

5. 春の融雪期に苗木が雪からではじめたときにも薬剤を散布すること。

(樹病科 小口健夫)